

## 奥宮慥齋日記——明治時代の部(六)——

島 善 高

### 解題

本稿には、奥宮慥齋日記のうち、明治五年二月二十三日条から十二月一日条までを翻刻した。十二月二日以降は、改暦に伴って明治六年となったので、次号以下に譲ることにした。また奥宮慥齋がこの時期に執筆した「初入省時愚存草稿」及び「贈井上君陪江藤司法卿洋行序」を参考史料として掲げた。それぞれの所蔵番号は次の通りである。

①「壬申日録 并癸酉改曆日抄」(高知市民図書館「奥宮文庫」受入番号七一五一。なお、「明治五歳壬申春二月、日録、初續」七一五〇はこの日記の初稿であり、「壬申日録」で削除された箇所も多々ある。削除された記事の中で有用なもの幾つかを、翻刻文中に「日録」として補った。)

②参考史料一、「初入省時愚存草稿」(高知市民図書館「奥宮文庫」受入番号三一六三)

③参考史料二、「贈井上君陪江藤司法卿洋行序」(高知市民図書館「奥宮文庫」受入番号、全集慥齋著書三七、文稿中)

奥宮慥齋は官命を受け、明治五年二月二十三日に高知を出発し、同月三十日に東京に着いた。そして三月二十四日教部省九等出仕を命じられ、同省の記録課に配属されることになった。教部省は、宗教行政を司る機関として明治五年三月十四日に設置されたところである。慥齋は、既に神祇官権大史を勤めたことがあり、また高知藩でも宗教行政に従事していたから、その実績が買われて、恐らくは板垣退助の推挙によって教部省に勤めることになったのであろう。

明治四年十二月、左院は「共和政治ノ学ヲ講シ、国体ヲ蔑視シ、新教ヲ主張シ、民心ヲ煽動スル類」があるから、神・儒・仏の諸宗

派の事務を統合して「匪教ヲ正シ、人民ヲシテ帰向依頼スル処アラシム」るようにしたいと建議した。これに対して、正院は「教法ハ民ノ好尚スル処ヲ自択セシメ（中略）固ヨリ政力ヲ仮テ強ユヘキ理ナシ」と反対したが、江藤新平の強力な推進によって、明治五年三月、教部省の設置が強行されたのである（常世長胤『神祇官沿革物語』五四葉以下、阪本健一『明治神道史の研究』五六頁以下、島善高『律令制から立憲制へ』一七二頁以下参照）。

このように、教部省の設置にあたっては政府内部でも意見の対立があった。参考史料一「初入省時愚存草稿」及び参考史料二「贈井上君陪江藤司法卿洋行序」は、奥宮慥齋がこのような教部省をどのように見ていたのかを窺うことの出来る貴重な史料である。慥齋自身も、別段新たな宗教を創出することには反対していたことが知られる。

日記にしばしば登場する「井上琢馬」とは熊本出身の井上毅のことであり（島善高「鉄舟と兆民と悟陰と」悟陰文庫研究会編「井上毅とその周辺」一九〇頁以下参照）、慥齋が井上毅と最初に出会うきっかけを作った「木下某」とは、慥齋と同じ教部省に勤めていた木下梅里（通称小太郎、後に真弘）のことで、井上毅の師匠木下宇太郎（通称真太郎、号韓村）の弟である。また「魯教師」とは、日本ハリストス正教会の建設者のニコライを指す。

なお慥齋日記の六月二十一日条には、書生たちと『万国公法』を読んでいる記事があるが、慥齋は、自宅で塾を開いていた。

（表紙）

「壬申日録 并癸酉改曆日抄」

「三日、晴、無事」

時年五十九」

東行紀 壬申

壬申春正月、飛檄徵余於東京、余從客冬臥病從十一月申中旬患淋痛告狀于縣廳

（明治五年二月）

二月念三、晴、疾少間乃將發軔、兒叔亦適歸省正月相拉共發、二男竹村健吉亦請倍從、第六

時離布山郷貫、自門前命扁舟、沙淺舟屢膠、第九字達浦門、登汽船願号々、女兒輩亦送到此、拱手而別、離情作惡、不能無悽惘、午後第一字解纜、發浦門、日晡過東寺岬、風浪激撼、不安注病、与淋痛並發、苦惱殆不堪、夜蓋半漸就眠、鷄鳴近浪華

念四、小雨、午前六字入華港、買扁舟、投逆旅於松魚橋下、既報午、雨零々降、兒輩出街買物、余亦浴了散步、晚放霽、早就寢

念五、晴、朝遣兒於春日寬平贈物、又買眼鏡、發程日遺故鏡也

今日よりハ古き眼鏡を打捨て あたらしき眼に着かへて見む  
午後、春日寬平氏見訪、久闊之情話、不覺移晷、快不可言、但談時

事、頗覺歉然、診予疾、為与藥劑、芎藭膠芥湯也、余近不信漢医、而服之稍覺効、夜小畑生來訪

念六、晏起、嘗藥、春日門生來診、惠香魚及寒貝、午前有人云、今日阿波汽船丸發往東京、急理行李、命小舟、風浪大作、努力移本船、或云、後乘者阻風、夜宿天保山下、淋病時發、不能眠、是日托古釵數口於弘田生覺賣、皆古名匠所鍛、然亦章甫冠類耳

念七、晴、猶碇泊同所、午後移兵庫港口、或云、亦泊此

おもひきや麻耶の御寺の鐘の音を うき寐の床に又聞むとは  
昔年泊此、有摩屋鐘声落枕頭句、被衾臥、半夜夢覺、乍聽蒸氣轟々、蓋發此港矣

念八、微雨、揭窓眺紀山重疊於烟雨中、想像芳墊花候

雨雲のよそに見るたにうれしきを よし埜の山の花の明ほの  
船傍紀灘行、風逆難進、無聊之餘、戲与諸人狂吟唱和排遣、福岡旧大夫稍解吟、長岡村山生等亦善諱、夜無事、熟睡

念九、猶沿紀海行、風生船駛、須臾入遠洋、滿帆含風、与蒸氣相称、船中座極妥帖、過遠洋如此亦稀云、夜無疼痛快寢  
契あれハ遠つ近江の梶枕 うき寐の夢を又も結へり

大晦、晏起、掲窓戸、曉霧濛々、不辨咫尺、船果迷方嚮、遙過品

海、会漁舟為指点、始入品海口、雇小舟上陸、飯逆旅、浴後命小車入東京、觀鐵道築造、実可駭、云、本月念六東京大火、自皇城東南數十丁為焦土、延燒築地外国旅館、故乏逆旅主人、飯鍛橋外、日晡投宿於島原入船街小樓、夜西杜姪來訪、且喜且駭、剪燈鄉話、至燭見跋辭去、姪自去年遊学、今寓于後藤議長家、是夜安眠、不覺曙光滿窓

（明治五年三月）

待命録 壬申

三月朔、新霽、暖、申田生來訪、云、板垣參議請余題其祖信形肖像、今年四月、機山武田信玄為三百年忌祭、所謂二十八將裔遠孫、皆摸其祖肖像、以供祭奠、夜早寢（朱筆）「板垣參議、即板垣信形之裔也」

二日、陰、申田生齋來板垣信形畫像、乃題數字其上層以返与、浴後散步街頭、抵日本橋上、西杜姪・杉本生等來訪、晚觀延燒処、鍛橋旧邸亦為灰燼

三日、美霽、上巳佳節、士女滿街雜沓、樓上獨坐裁家書、殆不堪技痒、乃命小車觀花於東台上、遊人如織、歌吹浦發、酒氣花香撲人鼻、余久痾禁杯杓、為獨醒、客徘徊醉鄉中、途上忽得狂蜂舞蝶歌吹地、醒眼看花亦一時句、懶足成一詩、四字後復命小車歸寓、兒輩亦縱遊、是夜兒收入勸工寮

老の身も人の力を車にて 花見て廻る御代にあひけり

四日、晴、閑、檢旧書籍、欲典却之、晚訪北代生于備前橋、暫話、  
騷雨輕雷

五日、霽、書肆奴來、約賣書、健吉訪白石生、云近日帰郷、晚散  
歩、遇宮崎生、云正月入京、寓小野氏、池月生來訪、余不在、留建  
白書稿本去

六日、晴、書生數輩來會、丸岡少議生亦來話、情頗熟、池月生云、  
近日里見某等陰謀事、皆就捕縛、其徒三百人、晚街上遇旧識書肆  
奴、相別幾十四五年、既畜妻孥、因侑一杯、余不深飲、直辭還

七日、春陰、拉兒輩抵兩國橋下、聽劇音、帰途遇雨、命車還、是日  
白石生等數人帰郷、付書信

八日、陰、微恙、擁衾看書、豚兒買洋服、價十五圓、夜風雨豪

九日、終日風雨晦冥、擁衾讀西国立志編、字々句句能警人、大率不  
出於勤勉忍耐四字、蓋近來之好書也

十日、霽、訪伴福留等、午後拉兒輩詣琴平社、因訪工部省、兒未散  
衙、登愛宕山眺瞻、晚桜猶著花

十一日、陰、訪細川中議官於八丁隍、坐客二人、一曰古路根乾堂、  
嘗奉命使支那、因話彼土事、晚兒來

十二日、晴、命小車觀晚花於墨陀堤上、雖稍殘猶多、遊人雜沓、途  
上矢口狂吟數首、皆不記

十三日、晴、訪長岡謙吉於槓街、晚宮崎生來話、請借看王文成公  
集、乃付全套

十四日、晴、拉兒等觀劇於猿若街、々頭列植桜花、劇間憩樓上對花  
亦佳、晚還寓、往還皆命小車

十五日、晴、南風、朝八字後、米人某館火、無延燒、晚健吉寓工部  
別寮

十六日、訪丸岡氏、不在、遇村山生、借上海訳書數部來

十七日、微陰、宮崎生來話、淋痛未愈、乞藥山川氏

十八日、終日雨不歇、擁衾読書、刪訂草稿<sub>教法論等</sub>

十九日、雨猶豪、聽軍談、徹夜風雨晦冥

念日、猶雨、豚兒來、相拉又聽軍講、夜関口誠一來訪、云十七日自西京來、寓芝口、是日付郷書於商社

念九、晴、養痾在蓐、無事

念一、新霽、訪長岡生、神原養道來會、暫話辭去

（明治五年四月）

四月朔、晴、関口生來、請島本司法判事添書、即書与之、晚散步街上、聽劇音

念二、晴、関口・村山・西杜姪等來、相拉訪米人加尔曾兒氏、以事辭不遇

二日、晴、無事、健吉付金

念三、晴、申田生來、縣廳伴來、云明念四第十字可出教部省、晚豚兒來賀

三日、晴、猶告疾、宮地巖夫來、云三月朔發郷、取路於東海道、一昨日達東京

念四、晴、朝第九字後、着礼服登 皇城、拜 命於教部九等出仕、午後以無事辭歸、晚西杜姪亦來賀、与豚兒拳杯杓、喫牛肉、夜適松物街撿逆旅、相政周旋也

四日、陰、出省、無事、写規則條件  
五日、晴、出省無事

念五、晴、參官、教部係記錄課、山口縣人藤田順華、鹿兒島縣人山之内時習等為同僚、終日不事々、第三字後退食、移寓於松物街

六日、陰、出省、宿直、最閑、涉獵新聞排遣

念六、休暇、訪長岡生、在蓐、暫話辭去、晚与村山生訪清涼寺雪爪

七日、晴、九字退食、午後散策、途上遭宮地生、拉過兩國橋下聽劇音、雨俄至、命車歸

念七、告疾不出、宮崎生來話、晚散策、得二月念家信

八日、晴、朝覺淋痛、告官、是日換古金貨七十圓許、西姪來宿

念八、陰、朝東丸岡氏告疾

九日、晴、無事、養痾不出

十日、晴、出省、無事、草建白

十一日、雨稍霽、訪長岡氏、見示近旧詩稿

十二日、晴、出省、祀官僧徒數十輩拜命教官、皆十等也、与雪爪老人閑話官中

十三日、晴、告疾、又換寓於北松物街伊勢利別居、約月二圓二方、質金二十五圓、是日旧婢來、執厨下事

十四日、出官、無事、得三月念五家書、即裁返書、付船便

十五日、出省、濱田八束來自豫州石鐵縣

十六日、晴陰不定、拉宮崎生、訪勝海舟於赤坂旧紀邸、話頗熟、海舟為書忍默二大字、及錄詩二首見示、又贈佐久間象山省侃錄新刻本、歸途訪坂本惇輔、不在、命小車返

十七日、晏起、関口生來、出省、是日大后祝賀

(日錄)「十七日、晏起、陰、関口生來、直辭去、出官、無事、是日大后祝賀、淨國寺徹定、拜命於本省、晚退食、微雨至、夜晴月色奇明」

十八日、晴、微恙、告官、已後与長岡謙吉命舟詣橋場、將調 容堂

旧太公、以事不遇、散步墨陀堤上、憩梅莊、梅子既可喰、又渡淺草、登五層塔、飲甲子樓、帶醺返船、是日皆拉婢輩、歸寓則報六字

十九日、晴、出官、無事

念、晴、出省、屬書信於三川商社

念一、休暇、坂本・長岡二生來話、移晷、午後訪阿部真造於深川、暫話、夜歸、月池生不在

念二、晴、出省、豚兒等來、微感冒、早寢

念三、陰、出官、稟月給五十圓、夜大雨傾盆、濱町火

念四、新霽、出省、夜半石町火、頗近、起理行李、西姪・関口・田部生等來省、徹曉消火

念五、出官、斷案盲僧一條

念六、大風埃、休暇、訪福留氏、散步淺草辺、歸命車、取路於東台下返寓

念七、晴、告疾臥、吉本・南部二生來訪、蘇我巨亦來晤、云明後崔

号艦発、因裁書、豚兒来

物おもふ胸のけふりも消て今日 氷室とともに開くうれしさ

念八、晴、近重生見訪、云昨至自濱松縣、是日付書籍及家信於三川商社、書籍則日比生所囑、貸金五圓於白田氏、健吉来、付二圓二方、又付一方半、惣計二圓三方半云

六日、雨、終日蕭條、服部性齋来話、命飲、晚雨益豪  
七日、陰、出官、移課席、高崎議官為課長来臨

念九、晴、告疾

八日、陰、出官、無事

大晦日、晴、出官、無事、宿直与齋藤某、頗素心、談奇事、夜蚊多、雨

九日、陰、出官

十日、同昨

(明治五年五月)

五月朔、稍霽、九字退食、散步浅草辺、往返命車

十一日、休暇、雨終日不歇、作家書、来客数人、午後雨甚

二日、晴、出官、無事

十二日、大雨、冒雨命車参官、檢草稿、晚退食、濱田八束帰郷、付囑書信於土宜

三日、晴、無事

十三日、新霽、早起、草建白

四日、陰、出官、入編輯課中、田中頼庸・山内時習等已下凡五人

(日録)「被命編輯課、田中頼庸・世良孫植・山内時習・木下某及余」

十四日、感冒、告官、渡辺習齋来訪、移刻話、一別数年、話緒尤長

重五、雨、訪長岡生、喫氷、又訪細川氏暫話、被命酒、帰途訪森本木三、又飲、云岩崎弥太郎来須待、予辞帰、長岡生来翰有哥、賡之

十五日、是日亦告乞疾、乞藥山川医員、宮崎万八来

十六日、晴、無事、休暇、服部老人來、促赴中村樓書画會、余辭、是日亦來客數輩、殆可厭

御用之儀有之候條、明廿三日第十字札服着用出頭可有之候也  
壬申五月廿三日  
教部省

十七日、雨、告養痾、在葦、晚世良氏見訪、云官中亦多感冒、木下某等皆告疾

奧宮正由殿

十八日、雨、晚稍霽、渡部老人來話、至夜分見燭跋、是日加藤有隣被惠櫻花酒一瓶、花香可愛

念三、新霽、是日晚四字  
皇上巡幸西國、初發輦於東京、因賜休暇、拉宮崎生訪高崎議官、不在、未後拉宮地嚴夫訪獨園禪師於芝金地院、被饗蕎麥酒飯、辭去、又訪中村老人於麻阜宮下街、日晡歸寓

十九日、雨豪、呈草稿於高崎議官、晚過長岡氏

念四、微冷、是日拜八等官之命

念、雨不歇

(日錄)「參官、礼服、拜八等命

奧宮正由

念一、雨、休暇、衝泥訪魯人尼個礼、不在、遇渡邊老人暫話

八等出仕申付候事

教部省

念二、雨、命車參官、示顯幽說同僚等、晚福羽大輔折簡見招、又命小車往、坐上有客、云千家尊福、所謂出雲國造也、大輔被囑祓除身滌一条、千家氏亦有此囑

念五、雨、出官

念六、休暇、雨、終日不出、看書排遣

(日錄)「示顯幽二境說於同僚田中頼庸等、晚退食、福羽大輔折簡見招、又

念七、雨、命小車出官

命小車往、論事、大輔云、祓除者先年子建言、方今將行此事於闔國、以子為之周旋、余乃頗盡言所見、因示布留伯幾氏所贈跋言、坐中遇有客、則邂逅於楼上、千家尊福云、出雲所謂國造也、尹人亦与禊事云、是日有命、明廿三日着礼服可參朝、即請書

念八、朝雨、晚晴、出官、夜兩國烟花、命車至橋下、雜沓甚

(日錄)「夜拉婢觀烟花於兩國橋下、往還命小車、是日高木少丞來編輯課

中一

念九、新霽、出官

八日、晴、早起、出官無事  
九日、暑、出官

卅日、晴、出官、本省移席、編輯課亦随移席本省之跡

十日、熱倍昨日、從是日一字退食云

（明治五年六月）

十一日、暇、朝聞長岡生之赴<sup>註</sup>、使豚兒弔之、云今夜葬於麻生某寺

六月朔、早起、乞診於佐藤少典医、乞水藥帰

十二日、暑尤酷、出官、夜微雨、有些涼氣、稟得八等半月之給十圓

二日、晴、出官無事、晚訪渡部習齋、欲遇魯教師、適不在、遇大辰巳某、魯教師之高足云、頗聽天教大旨

十三日、陰、出官、午後退食、草教諭文、夜散步、是日稟収逆旅料二十一圓

三日、晴、告疾看書終日、西姪來話、魯教師尼個礼氏來訪、暫話辭去

十四日、熱倍甚、告官草教典文、不出

四日、猶告疾不出、看書排遣

十五日、携所草出官、田中頼庸不出、故不示他

五日、晴、出官無事

十六日、夜來雨徹曉益豪、服部老人來訪

六日、休暇、閑無事、訪清涼寺雪爪、暫話、阿部真造、池月真池共來話

十七日、雨、早命車、出官、夜騷雨

七日、晴、暑甚、出官、草教典、晚觀演劇

十八日、雨徹曉、出官

十九日、晴、告疾、改竄草稿

念、晴、早起、出官、晚命車往橋場、奉問旧老公之病

念一、晴、暑甚、終日不出、岩崎介吉來訪、与西姪等讀萬國公法

念二、晴、出官、橋場老公赴至<sup>⑤</sup>、云昨夕、終至不諱

念三、晴、暑倍昨、告疾不出、是日使豚兒弔老公、予以疾不能往

念四、暑、上八十五度、是日薦拳式定

氏名、生国、管轄、身分、年齢、技能、著書、履歴

右注各條署推拳人氏名調印

念五、晴、出官、薦宮地生

念六、晴、休暇、暑如酷吏、怕而不出

念七、晴、出官、又被移課於日誌

(日録)「炎氣甚、出官、又改課於日誌係、云八木、松岡与余三人也、遣豚

兒於羽柴、云明朝太公送葬於芝青松寺故也」

念八、晴、暑甚、今晚徙太公靈柩於箱崎邸、奉入品川山、凡送葬者

二千四百余人、朝廷賜歩・騎・砲・近衛四大隊、以護送之、予以疾不能拜送

念九、晴、出官、入日誌局、松岡隣与余只二人耳、頗閑靜、是日省中大半拜命本官、所遺僅々三四人、余等在所見遺、今夕夏越身滌、判任惣代人田中頼庸、足達某云、涼意覚頓生

いつしかに櫃のにはひもなつかしき 夏の衣に秋ハ来二けり

(明治五年七月)

七月朔日、微陰、訪宍戸大輔於九段坂、不在、訪小野少丞、亦不遇、遂迂途訪黒田少輔于赤坂門外、夜雨

二日、朝陰、晚雨、是日宿直、托大島某代直、得家書、六月十二日發故郷、便作報付汽船

三日、微陰、告疾、終日閑無事

四日、殘熱甚、浅井晴文來訪

五日、雨、命車參官、十字後狂風暴雨驟至、午後忽霽

六日、新霽、休日、訪細川子、不在、訪下村氏、細川氏亦在、暫話辭去、適麻阜材木街、檢賣家、夜熱最甚、杉本生來話

七日、晴、早浴冷水、訪清涼寺、不在、畏熱終日不出、晚関口生来

八日、雨、出官、晚服部子見訪、被示建言

九日、霽、出官、定章程、是日謙之・縫姪等至自國、云本月朔発浦門、滞坂三日、今曉達品川、一家皆平安、可喜

十日、稍秋爽、早起、点燈看書、今日省中分課章程始定

十一日、微陰、早起、訪雪爪老人、暫話、訪板垣參議、不遇、云明朝可來訪去、訪魯教師之寓、談話移晷、時無來客、唯余与教師二人也

十二日、早參官、宿直、是日

皇帝還御、夜初更南風甚勁故、晚至

十三日、晴、風猶不止、退直、無事、呼書肆奴、閱新刻書類

十四日、晴、賜休暇、二字訪板垣參議、暫談時事

十五日、晴、閑、夜月色奇明、步月散步、宮地生來話

十六日、炎威倍昨、豚兒等觀博覽會、丹保生來晤、頃日至自勢州

十七日、微陰、出官、草笥子

十八日、官衙閑無事、与雪爪老人於草稿

十九日、告疾家居、諸生數輩來話、昨日豚兒歸郷故也、拮据匆々、夜大雨傾盆、是日健吉・姪等三生入勸学義塾

念、朝陰、午晴、忙甚、第一字豚兒発軻、余与姪等送到三川商社、

宮崎生亦來、生以患脚疾歸國云、午後三字豚兒復返寓、云翌黎明乘船、渋谷生來訪、付臥榻料三兩二分

念一、早起、豚兒七字頃発軻、予亦送到商社、宮崎生先在、歸後訪吉永良吉、問鉄橋成否、晚二字板參議伴來、即往談教義、移晷、夜下利數行不已、蓋中暑歟

念二、微雨、出官、与小野大丞論事、小野氏見示神教要旨略解等、退食後、暴瀉數行、夜大風雨、西森姪・関口等宿、屋舍搖撼、不能寢、井上琢馬見訪、尹肥後人、頗嗜学、有存儒論之著見示、余嘗邂逅於木下氏許

念三、新霽、暴瀉倍昨、困憊甚、関口生出途歸郷、朝川・久保生來、云金六街山内從五位之家可賣、值百二十圓、即成約、割分三月、一月四十圓約條、松岡隣來、齋月給七十圓、予乞診於橋本軍

医、々々亦病、門生某来診、投水薬去、「日録」使西姪上書於參政板公、凡三通

念四、新霽、秋氣稍生、夜来瀉下十三四行、達明不歇、乞葉橋本医、西姪来護、見示井上生書、大意可喜

念五、陰、冷氣俄至、因亦感疝痛、疲憊中絞痛不可堪、招医皆不在、適前隣有老婆、善鍼術、即呼来、下腹背數十鍼、稍覺痛退、至午後疼稍減、彎急甚、晚又発痛、婆又来鍼、随発随鍼、殆至夜、四字山川高足戸原生来診、云腸胃甚衰弱、即投散剂水薬、橋本門人亦来診、夜痛稍止、但困憊之極、欲眠不得眠、下利少止、快々徹曉

念六、微雨、冷氣襲人、雖痛暫歇、痙攣甚、晚山川医員来診、云急須補腸胃衰弱、乃投水剂、橋本門生亦来、云猶有痛意、必可再發、夜果発痛、服一丸覺効、且眠且醒、下利頓歇、心下痞滿、曉遂一吐、即止

念七、微雨、告官乞一週養病、白田老父来訪予疾、且談轉居事、因托塗壁工事、付金六圓、川久保生来、明後暇日、約付金六十圓、夜半腹痛復発、苦汗如流、曉来騒雨一陣隨風至、枕上尤無聊

念八、晴、朝上厠、燥屎五六枚、稍覺胸膈開闊、遣兒輩乞葉山川氏、西姪来云、又移居湯島、本省伴来有命

#### 教院調掛申付候事

八等出仕 奥宮正由

少丞天野以書命之、同僚松岡代拜命、夜半復発痛、到曉癒

念九、微陰、腹中痙攣、覺微痛、山川医員来診、云残疝未治、作菴布貼腹、夜痛果不発、初快寢

大晦、夜来有雨蕭然、秋氣可掬、又瀉下二行、太疲憊、喫鮮魚有味、川久保来

秋風ハ西の海より立と聞けは たより床しき頃にも有哉

布師川さはしる若鮎ぬなは草 家路の味そ且は恋しき

遣兒輩付書翰於本省、備西姪書旧作梁父吟、貼壁看排遣、因改数字、得豚兒正治本月念七発浪華書信、云念一晚発艘品海、念二第十字抵遠洋、風浪暴起、十二字最甚、船欲幾轉覆、激浪入烟突、船中濡沾、水夫亦皆注病、夜六字變西風、漂到八丈島洋、曉六字風稍歇、翌念三碇泊御前崎、同念四朝発御前岬、念五夜十字始達華港、投港橋阿波屋逆旅、且云脚氣手足麻痺、淹滯就病院、是日付金六十圓於山内從五位家從大澤光正、夜腹痛始平、但覺舌上爛傷艱言語耳

#### (明治五年八月)

八月朔、曉下利一行、覺疲労、是日移居於京橋東金六街、拮据匆匆、午後雨亦至、雇船送行李、予亦扶疾乘船

呉服橋あやしきまでにうつり行 世のうき波に任せてそ住む

蓋感人生無常、伊勢利返二十五金、薄暮饗蕎麥、且贈隣家、夜雨豪、瀉下二行

二日、新霽、命健兒等糊障紙、戲吟遣悶

徒弟同士わつか障子の争ひハ　はりあひもなきけむくわなりけり  
又詠牛矢橋新居

幾度かうき世の坂を轉ひ来て　すへりと、まる牛の屎橋

示兒姪、呵々大笑、得七月念二発家信、一家平安也

三日、新晴、早起、健兒返塾、終日閑無事、又得礼弟及兒女家書、

云七月十日発、乃作報、困倦殆不堪、姪兒來宿看護

四日、晴、姪等返塾、付報書於商社、又托金七圓於姪

五日、秋霽爽氣、得家書七月念二所発二簡、葺工來、托同僚乞因疾

賜告、晚宮地生來、為招齋神明、饗饅飯、夜豚兒等宿

六日、秋晴如拭、早起、稍覺快、臥榻看姚江全書、比旧覺近異矣、  
無雜客最閑

七日、罕晴、曉來瀉二三行、又疲弊不欲看書、戸原生來診、脚氣

也、急服強壯収斂利尿之剂、宜撤戸障通大氣

八日、秋風颯然、井上琢馬來、葺工亦來、下利三四行、晚山川醫  
員來診、云腸胃極衰弱、宜強壯収斂、甚難療、投水利去

九日、雨蕭然、雪爪來東、云大輔宍戸氏問予告疾之意、病頗不能即

答、病間把筆、作与雪爪書、及上板參議之書、亦力疾言志也

十日、秋冷暗淡、覺稍快

十一日、晴、姪等來訪、閑無事、山川醫員來診、云稍將癒、可喜、

田部生來、云兒正治猶淹浪華、今月五日与弘田兼二浴有馬温泉

十二日、晴、無事、刪草稿、又裁家書

こちくと落るとけいの音聞けは　秋の長夜も命なりけり  
何事もこまかし馴れて命さへ　まこと死ると思はさりけり

其餘有狂吟、皆忘了

十三日、晴、曉三字震、從此不寢、汽船至自坂、得七月念七禮弟

書、岩崎・谷等來訪、是日覺稍快爽

十四日、晴、岩崎生見示近作、欲賡韻懶不果、裁家書、試歩門前僅

三四十步殆艱

明日の夜の晴むはしらすおり立て　今宵の月に歩み習はむ

是夜月色奇明

契りあれハまたもつき地の秋の月 幾圓なる影にあふらむ

十九日、冷氣襲人、終日無客、尤閑寂、夜利岡兄弟來話、移刻去

十五日、微陰、午晴、閑寂、終日人來、夜田部生來侍、月色入  
戸、照吾臥床、愴然有客況、示田詠於田部生

念、陰、朝利岡武又來訪、聽橫濱近事

獨のミ詠る窗にさし入て こ、ろのくまを照らす月影  
又即吟

念一、晴、無事、田部生來、付宇田洋五郎自坂來書及金若干、弘田  
生亦有翰、無別事、岩崎生來話、示井上琢馬存儒論、即懷去

梓弓身にいたつきの入しより 矢よりもはやく月日こそ思ふ

念二、晏起、姪輩來訪、妙蓮寺石舟見訪、齋來月給、因暫話教院近

十六日、秋雨蕭然、掩衾眠臥榻、欲改竄草稿、懶而不果、乃思廢岩  
崎生韻、以遣悶

況、宮地生來云、今日拜命訓導職

久矣文章不值錢、猶將宿習送殘年、病來併廢詩兼酒、對月南樓獨  
悄然

念三、冷雨蕭條、獨守閑寂、田部生乞前日所托殘金、乃与之、終日  
雨不歇、夜窗岑々、聽滴聲、頗有客況

白髮青雲功未成、何因此地寄殘生、獨憐明月良緣在、兩度中秋看  
帝京

念四、早起、点燈閱書、婢祝眉易髻、父及從弟女等來、因命酒飯

十七日、晴、午微雨、西姪來、托建言書於村山生、以贈雪爪、返縣  
廳所借書籍二本 薩字書  
歷史

念六、無事

十八日、晴、無事、豚犬等來、令返縣廳本五冊、蓋元谷氏所借也、  
村山生來訪、云昨所托書即達雪爪老人、會有座客、故不尽言、然有  
不可行之意、可惜哉、予亦慙然久曰、真命矣哉、山川医員來診、云  
漸向快、可喜、夜試步踰淺利橋

念七、朝試步近傍、劇場既落成、宏壯可駭、晚宮地・山本二生來、  
贈書川久保生

念八、雨、収八月十四日之家書、晚又得豚兒八月念四浪華書

念九、雨、教部省有命、明十日着禮服可參朝、以托宮地生、謂必免職矣

大晦、霽、暑氣如盛夏、杉本生見訪、云頃浴函嶺温泉、今寓築土、写古事記略注以遣排、晚宮地生來報、云拜命本省大録、真意外之事也、命蕎麦、暫話辭去、付金三十圓於山内家令大沢氏

〔明治五年九月〕

九月一日、微雨、午晴、初命車抵山川医員受診、見許浴湯、乃浴、覺太疲困、荒尾生來

二日、大霧四起、咫尺不辨、散步近傍、喫牛肉、松岡隣見訪、返拙著人間交際論、〔日録〕「午後西姪來話、共讀民法」「夜西姪宿」

三日、秋陰暗澹、神原養道見訪、命飲、半日亦適也

四日、試歩、訪岩崎生、被返草稿

五日、陰、人云、此地近日可除去屋宅、浴湯

六日、朝托利岡乙弥、神原精二來話、小酌話心事、得八月念八家書

七日、雨、報家信

八日、雨、靜閑、夜大雨、徹曉、本省有令、云明九日鐵道開、依雨延日期

九日、霽、重陽、無事

十日、試歩詣琴平社、士女雜沓、命車返、夜月色甚佳、步月下

十一日、微雨、無事

十二日、微雨忽晴、是日開鐵道、帝親臨幸、士女雜沓、縱觀延遠閣内、予亦往觀、点燈數千、如大祭賽、得家書九月二日發郷、云八月晦正治帰郷、即作報付汽船

十三日、晴、無事、試歩訪神原養道、不在、增上寺中開扉黑本尊、甚雜沓、恰如浅草香火、夜月明絶佳、獨坐樓上、有客感寐るも惜し寐ぬも馬鹿らし今日の月

聊遣興耳

十四日、秋氣早冷、又訪神原氏、被命饅飩、往返皆小車

十五日、晴、神原子來、暫話

十六日、晴、秋色可愛、但艱步耳、森生來話、因返所借書

十七日、無事

十八日、豚兎等来

十九日、無事

念、晴、濱田八束至自豫西條、話久濶、神原子亦来、命飲、石舟亦来、云念二天長節、賜宴於本省

念一、暁雨、無事、散步、収家書、一礼弟、一豚兎、云本月十八九日必乘船可来

念二、付家信於雀艦、是日天長節、諸官員早朝參賀、本省伴来、賜杯肴

君か代を猶長月のなか、れと宮もわらやも祝ふけふかな  
満街賜酺、歡呼聲四発、云街々出花鉢

念三、閑、無事

念四、夜来雨、徹曉不歇、石舟齋今月々給、云分課改為教院掛、猶有改革事、濱田八束拜命大藏十等

念五、霽、神原氏来、付神教要旨、同略解

念六日、陰、西姪来、校書、中村光枝伴来、返古事記略注及裏書二本、晚訪石舟、不在

念七、薄陰、付家信於夕顔船、夜訪雪爪、改姓鴻

念八、寒雨、滌然、午前九字、初命車出官、入教院課中視事、晚退食、疲甚、夜諸生来

念九、晴、出官、無事、訪宍戸大輔、不在、〔日録〕〔途遇丁野生〕

〔明治五年十月〕

十月朔、晴、訪岩崎生、暫話、渋谷生来晤、乞借西学一班、即付之、付豚犬等金各二圓二方

二日、雨、出官、省派遣人、巡回諸国、凡十二人拜命云

三日、雨、告疾、昨冒泥、因覺脚腫故也、無事、擁爐看書  
春よりも秋よりも猶淋しきハ、そ、ろ寒けき雨の夕くれ

四日、晴、伊藤良馬見訪、云近日帰自茨木縣、久話命飯、淡中新作亦来晤、云拜命陸軍八等、寓檜物街、曾參備曹源寺義山禪師、稍有省、夜神原氏見訪

五日、晴、小畑生来訪、云頃日来東京、取路於海道

十五日、出官、無事

六日、晴、宮地生来、見示伯家書目、書數極少、且無奇書、僅々四百餘種云、付月謝金十圓二万於健児、得春日寛平氏書

十六日、雨、与同席同僚觀劇於猿若街、凡八名、往返命車

七日、無事

十七日、晴、出官

八日、晴、出省、本課又移本省之北、遇大輔及雪爪、云明日談事

十八日、出官

九日、晴、出省、々中与宍戸大輔等論事、退食、則家人豚児等皆至自郷、云九月念七発郷、滯浪華、七日（「日録」「発浪華」）、今日達品海、夕顔号船、改太平丸、拮据勿々、夜出街買物、神原・利岡等来

十九日、石塚某来晤

十日、風雨、命車参官、晚豚児等皆来会

念一、晴、命車到麴街、因觀仮教院地

十一日、霽、休暇、晚訪利岡生、眞鍋豊平来会、尹浪華人、善一弦琴、一别殆二十年矣、恍如夢中、得郷書十月三日信

念二、雨、草教務課章程

念三、草章程、大洲鐵然来、齋月給

十二日、無事

念四、無事

十三日、雨、出省、与田倉岱洲抵芝金地院、試験学徒

念五、晴、無事、出省本省、卿・奏三人免職、不知何故、文部大木

十四日、出官、無事、晚覘劇場開業

民平兼本省、文教合併

念六、晴、休暇、拉兒女觀兩國淺草、迂路抵上野喫雁鍋、命車返寓、疲甚、人云是地限今月可除屋宅

念七、晴、出官

念八、陰寒、訪福富氏、談金策、談中生來

念九、雨豪、冒雨出省、是日文部省合併本省

大晦、霽、出官、抵仮教院、廻土器坂看賣家、遇健吉於勸学義塾、夜田部談中・浦川・神原等數人來訪、是日當地商人嘆願評定衙

(明治五年十一月)

十一月朔日、晴、無事

二日、陰、無事

三日、無事

四日

五日、晴、訪板參議、以日高不出官

六日、晴、休暇、雜客紛到、應接不暇、夜大雨風、晦冥

七日、晴、出官、々中有事、頗恂々

八日、雨、出官、午後退食、欲向島平岩招飲、不果、夜大雨傾盆

九日、新霽、出官、云大少輔今日出正院、頃日皆引退故也

十日、晴、出官、午後退食、草学則、晚看家於下谷田大洲中邸

十一日、晴、無事、是日定約移居賣家事、然菊原某變約、因延日期為十六日、付會田屋善助金二圓二方、下谷半月借家料也、弘田兼二至自浪華、話久濶

十二日、晴、出官、是日云大少輔出視事、然未出、布令五十三條新令

十三日、寒、無事、在寓草稿

十四日、稍暖、勝浦・宮地二生來會、議学則

十五日、陰寒、猶在家、草学制及学則

十六日、晴、休暇、今日移居於下谷竹町旧大洲中邸（「日録」「徒士街加藤旧邸」）、拮据極忙、朝訪板參議、不在、訪利岡生觀古画、晚遂命車舉家轉移下谷、命舟送運行李、豚兒督之、菊原未納殘金四十五圓、夜点燈掃除、下谷寓居如客中投逆旅、然既為寓、穩眠不覺曉

十七日、曉起睹庭柯、風雪皚々、因寒發痲、告官不出、終日蜷屈、纔開戸觀雪耳、奇寒徹骨、豚兒冒雪、適菊原重訂金、此日贈達所草同僚清原氏

十八日、晴、養痲不出

十九日、晴、命車出官、議字則

念、晴、出官、往返教院、試驗生徒

念一、休暇、訪松岡欲訥、々亦欲之南、共步返寓、又訪濱田生於隣邸、午後与濱田生觀神田歲市、小憩神田廟内、帰途買書二種古事記燈南秋江

念二、暖、午後欲訥來、相携散步東台下、飲一池亭、水禽喋々、枯荷蕭條、頗閑適

念三、晴、出官無事、早退、収月金、夜聽軍講家

念四、晴、出官、是日日本省判任已下皆免職、將位記歸、午後第二字復扱十數人留命出仕、予亦在留中

諸所出張官員ヲ除之外、判任官一同免職申付候事

但教導職兼務之者同断、尤教導職のミ之者并二等外官ハ非此限

壬申十一月廿四日

教部省

一、教務課并記録掛廢止之事

一、出納用度營繕掛合併之事

一、考證課諸陵課合併之事

一、歌吹掛事務之義ハ考証課二而可取扱事

一、新二教導調掛設置之事

同日

大凡本省判任九十余人之内、僅留二十余人云

教導調掛

八等 清原真由美

九等 奥宮正由

九等 大洲鏡然

九等 小栗憲一

十二 神原精二

々 石丸八郎

念五、陰寒、以天武帝祭日賜告、午後拉兒女輩散策墨田堤上

念六、小車參官、教正管長等合局、是日拮据勿々、不堪弁事

念七、出官、紛忙多事、不暇記

念八、紛々多事、却如無事、薦拳數人、多依旧套

念九、休暇

(明治五年十二月)

十二月一日、晴、休暇、無事、逍遙街頭、布告太陽曆以明二日為第一月一日、都下紛々然、既布令如固有之

參考史料一、「初入省時愚存草稿」

教法ハ人民ノ信從ニ任カセ、政府ハ只其妨害ヲ防クノミト云ハ、實ニ文明ノ公論ト謂フベシ、然ルニ今教法ノ大本未タ立定セズ、衆ノ信從亦未タ確ナラズ、所在紛々各其所見ヲ以テ教ヲ布カントシ、人民其適從ヲ知ラス、殆ント方向ニ迷フ時ハ政府豈ニ之ヲ坐視スベケンヤ、必ス之ガ本ヲ立テ之カ信ヲ定メ以テ之ヲ統轄セザルヲ得サルヘシ、是レ教部ノ由テ設クル所以ナルカ、因テ豫メ其教ノ範圍ヲ設ケ之ヲ三條ニ約シ以テ教職ニ示ス、一曰ク敬神愛國ノ旨ヲ体スヘキ事、二ニ曰ク天理人道ヲ明ニスヘキ事、三ニ曰ク 皇上ヲ奉戴シ朝旨ヲ遵守セシムヘキ事、而シテ廣ク天下ノ神官僧侶ヲ徴シ之カ教

正教官ヲ命シ、各所ニ説教場ヲ開ラキ大ニ教ヲ所在ニ布カシメントス、於此又議論紛興タリ、或ハ謂フ衆教ヲ折衷シ新タニ一大教法ヲ創立スヘシト、又謂フ必シモ別ニ立ツルヲ須ヒス、此三條ヲ範圍トシテ在来ノ神仏ニ教ヲ用ヒ、二者ヲシテ各自ニ教ヲ布カシムルニ若カスト、又謂フ中人上下ノ教法ヲ分チニ教ノ旧弊ヲ革新シ、方今ノ時勢ニ適セシムヘシト、或ハ謂フ万国交際ノ今日我獨リ宗旨ヲ殊ニスルハ公法ニ非ス、宜シク歐洲諸國信スル所ノ耶蘇新教ヲモ許シ開カシムヘシ、大使ノ渡洋セシハ必ス此等ノ事決定アルベケレトモ、早ク時機ニ投スルニ若カスト、又謂フ此議未タ晚カラズ、我が人心猶未タ居リ合ハズ、假令ヒ開クトモ姑ラク黙許ニ宜シト、愚亦竊カニ謂フ、初ニモ云如ク教ハモト人民ノ信スルニ任カスモノナレバ、其本ヲ立其信ヲ堅メ之ヲ統轄スルモ亦猶衆信ニ因ラザルヲ得ズ、況ンヤ其教ヲ定ムルヤ、若シ苟モ衆信ニ反セハ其成就スルモノ未タ之アラザルナリ、夫レ我ニ在テ衆ノ信スル教法ハ何ソヤ、神道カ佛道カ、抑モ儒道カ、儒モ古來崇信セザルニ非レドモ、専ラ中人以上ノ教ニ属シテ億兆ニ及ハス、唯衆庶ノ信從スルモノハ神佛ニ教ノミ、仏ハ最初ニ弘法ナリテ教法ヲ海外ニ敷ケリ、神ハ衆民之ヲ信スト云ヘトモ、教法ト云ハ民ニ敷ケ程ノモノナシ、故仏法盛ニナリ、佛法王法ト並ヘ稱スルニ至レリ、從來神道ハ即王道ニテ、朝廷ノ政道然レハ今何ソ新タニニ教ヲ創立スルヲ用ヒンヤ、旧ニ依テニ教ヲ用ユルヨリ外復タ別法ノ設クヘキナキノミ、然ルニ主客ヲ以テ云ヘハ神ハ主ナリ、佛ハ客ナリ、中古佛教ノ盛ナルル遂ニ主客ヲ転倒ス、本地垂迹ノ説ヲ立テ、今コノ意ヲ翻案シ我國固有ノ神道ヲ主本トシ、而シテ三條ノ教憲ヲ以テ之カ範圍シナシ(三條ハ神ニマレ仏ニマレ)其客トスルモノハ特ニ儒佛ノミナラス、諸子百家衆枝ノ末

ト雖トモ、苟シクモ我カ教トナリ益トナルモノハ悉皆資テ以テ之カ  
 羽翼ト為スヘキナリ、抑モ諸道ノ我カ國ノ學トナリ、我用ニ供スル  
 モノハ概シテ皆之ヲ國學ト稱シテ不可ナキ時ハ、則漢竺洋ハ無論、  
 苟クモ我カ神道王政ノ裨益ヲ為スモノ尽ク我カ葉籠中ノ物ニ非ルナ  
 シ、是蓋恐コクモ

祖宗神聖ノ貽シ玉ヘル所謂修理固成ノ孫謀ニシテ、即敬神愛國ノ  
 實務ナリ、苟クモ此孫謀ニタニ適ヒナバ、何ソ必シモ紛々彼我ノ論  
 アラン、此ニ区々芥滯アリテ漫ニ彼我ヲ争フハ皆眼孔ノ狭小門戸ノ  
 陋習ヲ免カレス、先王善ク人ニ取り玉フ大規模ニ非ルナリ、夫我  
 神道ト稱スルハ即今日朝廷ニテ行フ所ノ王道王政ニテ、別ニ所謂神  
 道ト号スル一種ノ道アル事ナシ、後世所謂神道ナルモノハ或ハ儒仏  
 ニ牽強シ、其淆乱モ亦甚矣、近代古學ノ諸先輩出テ、純粹訂正ノ功  
 ナキニ非レトモ、亦門戸ノ弊ナキ能ハス、且或ハ多クハ其皮膚ニシ  
 テ未タ骨髓ニ及ハザルガ如シ、故ニ猶幽渺荒誕一家ノ私説多ク、恐  
 ラクハ是ニテ諸教ヲ範圍スルハ覺東ナキ事也、一旦革正ノ拳アツテ  
 今日 朝廷行フ所ノ王道即神道ニテ別ニ所謂神道ト号スル一種ノ道  
 アル事ナキ旨ヲ最モ光明正大ニ掲起スヘキナリ、是併シカナラ億兆  
 ニ代リテ其方向ヲ知ラシメ、其教本ヲ立ル所以ニシテ、即亦 皇上  
 ヲ奉戴シ

朝旨ヲ遵守スル所以ナリ、然ルニ衆庶ヘハ只何トナク依旧テ神佛二  
 家ヲ用ヒテ教ヲ司ラシムト云大旨ヲ布告シテ、必シモ神道改正ナト  
 、故意ニ唱ヘ立ルヲ欲セス、先此議ハ大臣初メ数人ノ官員有識ノ士  
 云々スルニ過キサルノミ、是事ヲ詭秘スルニ非ス、只其紛々ヲ恐ル

、ナリ神道即王道ノ精義、別ニ詳  
 カニ論ス、故ニ爰ニ略ス

無用ノ神官僧侶ヲ化シテ有用ト為スハ、教法ヲ布カシムルヨリ妙ナ  
 ルハナシ、是乃今日ノ撰挙アル所以ナリ、然ルニ各家其宗旨門戸ヲ  
 張ラントスルヨリ、或ハ閼牆又龍斷ヲ私セントスル機ナキ能ハス、  
 之ヲシテ統一糾合スル教正ノ職任ナルヘケレトモ、同侶中ニテハ拔  
 群ノ高德卓識アリト雖トモ、恐ラクハ制御シ難カルヘシ、況ヤ尋常  
 門閼ヲヤ、若シ政府官員ニ在ラハ必シモ難シトセズ、然レハ此ニ閼  
 係スル官員ハ粗々二家教義ニ通セサルヘカラス、教部ハ譬ヘハ謡曲  
 能等ノ家本アルカ如シ、若シ粗々其意義ニ通セサレハ何ヲ以テカ其  
 役者ヲ統轄セン、況ンヤ閼牆龍斷ノ機アルヲヤ、況ンヤ教義紛紜ノ  
 秋ヲヤ、雖然又官員ニ一宗旨有テ偏党ノ意アルハ太タ不可ナリ、寧  
 口無學ノ公平ナル虚心人ニ若カス、此処極メテ難事ナリ、要スルニ  
 官其人ヲ得ルニ在ルノミ、宣教使ヲ廢シテ神佛二教職ヲ置クハ甚タ  
 善シ、其濶大ナルヲ以ナリ、然ルニ其名ヲ改メテ其実ヲ改メザレ  
 バ、寧口廢セザルノ勝ルニ若カズ、夫レ去リ難キモノハ人ノ意見ナ  
 リ、只其面ヲ改メテ心ヲ改メザレハ、其所為皆旧意見ニ出テザルハ  
 ナシ、人々固ヨリ意見ナキ能ハスト雖トモ、唯善ク時宜ニ適シ、變  
 通スルヲ貴フナリ、皇学家率ネ意見多シ、一時ノ弊ヲ救フハ善ケレ  
 トモ、矯枉過直モ亦少カラス、鈴屋氣吹屋ニ先生ノ如キ、固ヨリ一  
 時ノ人傑ナリ、若シ今時ニ出テタラハ必ス變化アルヘシ、今其糟粕  
 ヲ固執シテ時勢變通ナキハ用ユルニ堪ヘス、此処最モ以テ注意革正  
 セサルヘカラス

神社佛閣ヲ點シテ教場トナス、亦妙策ナリ、然ルニ廣狭ノ殊ナルト

衆ノ信否ノ異同ナキ能ハズ、今其狭キヲ廣シテ、信ゼザルヲ信セシムルハ、政權ニ在テハ能スベシ、然レトモ教法ノ本意ニ非ス、但其中ニ就テ最モ廣ク且信スル方ヲ択ヒ用ユヘキハ勿論ナレトモ、此中ノ流弊ヲ糺シ、規則ヲ立ル等、亦之ヲ検査セサルヲ得ズ、是亦政府妨害ヲ防クノ一端ナルヘキ歟、

教法ニ関スル資費ハ公費ヲ以テ給スヘケレトモ、神佛ニ集マル信施ノ財ヲ以テ其費ヲ助ケシムルモ、固ヨリ不可ナシ、此等ノ財物ト雖トモ畢竟公物ニ非ルナケレハナリ、然レトモ其源泉ノ私有ヨリ出レハ、亦私有ヲ以テ視サルヲ得ズ、今私有ヲ以テ公費ヲ助クルハ衆ノ信スルニ非レハ不可ナリ、此処最モ明白ニシテ、毫モ術計ヲ雜ユヘカラス、苟クモ此ニ術計アリテハ教法ノ本旨ニ非ス、且ツ教ニ托シ勸財ガマシキ事アルハ、公法ノ禁スル所ナレハ、寧ロ公然教稅ヲ取ルニ若カサルナリ、此等ノ処猶教官ニ任カスヘキカ、政府ノ関スヘキカ、亦注意セサルヘカラス、文部ト教部ハニニシテ一、一ニシテ二ナリ、概シテ之ヲ云ヘハ、文部ハ天下ノ諸生ヲ教育スルノ教部ニシテ、教部ハ天下ノ愚民ヲ文明ニ進マシムルノ文部ナリ、故ニ其議論相通シ相資テニツナカラ用ヲ相為スヘシ、苟クモ此ニ芥滯ヲ生シ、相軋レハ、両ツナカラ傷敗ニ至ヘシ、故ニ諸事打合セ、協心戮力互ヒニ相救ハンヲ要スルナリ、教法ノ革新及ヒ開板等ノ事、固ヨリ合議同論ニ出テサルヘカラス、此規模最モ以テ公共潤大、従前ノ舊弊ヲ去リ、将来ノ新益ヲ図ラサルヘカラス、若シ開板ノ一條ニテモ、或ハ一方ノ許可スル処、一方必ス禁制スルカ如キアラハ、何ヲ以テ天下ニ令セン、何ヲ以テ方向ヲ定メン、往々文明進歩ニ趣カ

ハ、必ス此処活大ナルヘケレトモ、豫メ二省合同ノ注意ナカルヘカラサルカ

### 参考史料二、「贈井上君陪江藤司法卿洋行序」

#### 贈井上君陪江藤司法卿洋行序

余君ノ名ヲ宮崎生ニ聞ク久シ、一日木下某ヲ訪フニ因テ、始メテ君ニ邂逅スルヲ得、立談ノ頃既ニ莫逆舊識ノ如シ、後君余カ隣ニ來寓ス、謂ラク晨夕談論切劘、以テ益友ヲ得タリト、而余適々居ヲ轉シ、君又將ニ其長官江藤司法卿ニ陪シテ欧土ニ行カントス、余聞今春神祇省ヲ廢シ、教部ヲ建置セシハ、職トシテ江藤氏ノ議ニ是由ルト、余亦此ニ承乏スルヲ以テ、頗ル就正セント欲セシコトアリ、因テ其門ヲ叩クト雖トモ、不在ニ會フ、卒ニ其説ヲ聞ク能ハス、嗚呼是天ノ良縁ヲ假サ、ルカ、將タ數アツテ存スルカ、抑モ余カ益友ヲ求ムルノ志切ナラサルカ、嚮ニハ西杜姪亦屢々君ヲ訪ヒ、相共ニ切磋益ヲ得ル、君因テ示スニ存儒ノ論ヲ以シ、且以テ下問ヲ辱フス、云是前年所著、嘗テ宮崎生ニ示シ、生數語ヲ其後ニ書テ返ス者ト、余時ニ臥病連旬、宮崎生姪輩日ニ來リ看護ス、宮崎生余ニ謂テ曰、先生未タ井上子ノ平生ヲ盡サ、ルカ、夫井上子ハ、初メ儒ヲ某先生ニ學ヒ經義ヲ研究スル有年矣、一旦幡然棄去テ、洋學ニ志シ、日夜苦學勉勵ス、僕共ニ南校ニ在リテ、之ト交ヲ締ス、大抵有志書生ヲ舉レハ、指先ツ君ニ屈セサルヲ得ス、最モ心ヲ律法書ニ潛ム、嘗テ佛ノ律法ヲ研究スルヲ以テ、司法ノ明法寮ニ擧ケラレ、國家法律ヲ

定ムル議ヲ賛成セントス、這回ノ洋行必ス此志ヲ成就セシノミト、余謂フ君ノ志既ニ已ニ如此、而シテ旧学ノ儒教ニ於テ、猶繼々遺ル、能ハサルカ如キモノアルハ何ソヤ、豈猶旧習ノ牽制スル所アルカ、將タ世ノ廢儒ノ論ニ激シテ、故意ニ之ヲ興サントスルカ、抑モ名教ハ人生ノ第一義ニシテ、世道ノ所係ノ重大ナル所以ナルカ、夫宇宙教法數種アリト雖トモ、要スルニ正權二教ニ過キス、正教ハ倫理綱常ヲ主トシ、現在ヲ云テ、未來禍福ヲ説カス、權教ハ禍福報應ヲ主トシ、幽冥ヲ説キ未來ノ賞罰ヲ云、正教ハ支那ノ儒ヲ以テ最トス、權教ハ竺ノ佛、希臘ノ旧教、耶ノ旧教及ヒ回々等是ナリ、是固ヨリ亦其風土人情ノ自然ニ本ツキ立ル処ニシテ、蓋皆然ラサルヲ得サルモノアレハ、孰レモ其主意ヲ知ラスシテ妄ニ是非スヘカラサレトモ、其究竟論ヲ極ムレバ真正ト假托トノ差ナキ能ハサルモノアリ、故ニ其禍福報應幽冥未來ヲ説ク、固ヨリ其風土愚蠢ノ民情ニ随フテ、一時権リニ如此手段ヲ設クト云ヘトモ、畢竟欺罔誑騙ノ術ヲ免カレ難シ、是其效驗速カナルカ如シト雖トモ、其弊害モ亦到底除キ難キ頑病ヲ貽スヲ免カレサル所以ナリ、況ンヤ後世文明ノ運、益々進ムノ機アレハ、窮理愈精到ニナリテ、教法亦一旦改革セサルヲ得サルニ至ルヲヤ、既ニ佛ニテ此説ヲ唱ヘ、古來ノ教法猶幽渺荒誕ヲ免カレスト云モノアリテ、更ニ旧教ノ奇怪ヲ信セサルノミナラス、新教ト雖トモ既ニ改正セサレハ、肯カハサルト云ヘリ、余亦竊カニ近來教法改革ノ説アリ、其説既ニ上言ニ載セタリ、但其一齊衆楚勢必ス行ハレサルヲ憚テ、敢テ抗言セス、今井上子ノ論ヲ閱シテ、先ツ予カ心ヲ獲タルヲ悦ヘリ、因テ其説ヲ節略シテ以テ附スル

ニ余カ陋見ヲ以テシ、之ヲ録シテ君此行ノ餞ト為シ、且以テ江藤卿ノ裁正ヲ乞ハントス、井上君ノ論ニ曰ク、夫万国開闢ノ初メ、文化ノ先鞭ヲ著ルモノ支那ト阨日多ヲ最トス、阨ノ科學天文地理百工技器ノ精巧ナル、支那ノ能ク髣髴スル所ニ非ス、然ルニ其俗怪ヲ貴ヒ、未來輪回ノ説ヲ唱ヘ、其支流一ハ印度波羅門トナリ、一ハ孟瑟ノ猶太教トナリ、後敷衍シテ耶蘇トナリ、欧土全洲ニ普被スルニ至ル、支那百科ノ學、唐虞ノ時ニ著ルト雖トモ、夏殷周二傳ヘ、文華ヲ逐テ实用ヲ失ヒ、日新ノ功ナシ、然レトモ倫理名教ニ至テハ、歷代相傳ヘ、更ニ孔孟ニ至テ、集大成ス、其道自然ニ本キ人ヲ假テ平常ニシテ隱怪ナラス、民義ヲ務メ鬼神ニ遠サカル、是二国ノ長短論ナリ、其盛衰ヲ論スル曰ク、支那ノ衰ル論スル足ラス、二千年前宇内第一ノ強國、二千年後、之ニ反シテ宇内第一ノ弱國トナル、其所由ヲ討ヌルニ、後世儒學變シテ文字癖トナリ、陳篇詞章ニ泥ミ、科學ヲ知ラス、學者盛年ノ精神ヲシテ、無用ノ虛文ニ用ヒ盡シ、徒ラ二人ヲ愚ニスルニ足ル、清太宗明人ニ與ル書ニ中國ノ弱キハ、皆爾來文人ノ罪ト云、虛言ニ非ス、西洋ノ如キハ、希臘以來今日ニ至リ、器械物産ノ精、人民ノ利用厚生富而教ヘ、加之其人勉勵苦心百科ノ學、文明ノ政ヲ扶ケ、唐虞ノ為シテ未タ能ハサル所ヲ為シ、富強仁壽開闢以來ノ盛ヲ極ムルコト、三代ノ比スヘキニ非ス、是二国盛衰ノ跡ナリ、抑モ往々盛衰ノ跡、人ノ耳目ヲ迷ハシ、公論ヲ失ハシム、耶教ノ行ハル、二千年宇内十ノ八、其紀元ヲ奉ス、是果シテ儒教ニ優ルモノカ、余始メテ耶教ノ深遠、人ヲ感セシムルニ足ルト思ヘリ、後所謂聖書ナル者ヲ讀ミ、且耶蘇傳ヲ閱スルニ及

テ、始メテ其浅陋取ルニ足ラサルヲ知ル、是稍知見アル者一見瞭然タルヘシ、蓋耶蘇ノ淵源ハ、猶太ニアリ、猶太ハ阨日多ニ出ツ、阨日多人、始テ靈魂不死輪回再生、天道地獄死後ノ賞罰ヲ論シ、又一種高上ノ旨アリテ獨一真神無始無終ヲ説クニ至テハ、幾ント独歩ノ卓見ト云ヘシ、是乃猶太耶蘇嗎哈默三教ノ祖ナリ、猶太ノ教祖孟瑟ハ、非常ノ姦雄ナリ、初メ猶太一族俘囚ニセラレテ、阨日多ニアリ、孟瑟ニ至テ舊約全書ヲ著シ、開闢ヲ説キ、洪水ヲ説キ、アブラハムノ神約ヲ説ク、大抵一部ノ讖書ニシテ、神怪ヲ假テ以テ阨日多ヲ離レ、故土ニ歸リ、敵地ヲ略スルノ謀ヲ成スニ過ス、阨日多ヲ言フヲ忌ムト雖トモ、実ハ阨日多教ヲ潤色シテ、一層怪誕ヲ加ルノミ、他ノ發明ナシ、其後數百年其徒已ニ衰テ、耶蘇孟瑟ノ讖ニ應シ、猶太ノ近地ニ生レ、夙ニ其説ニ湛ミ、又其弊習ヲ矯メ、更ニ一機軸ヲ出シ勇往猛決、自信シテ疑ハズ、兵力ヲ假ラスシテ一世ヲ風動スル、遙カニ孟瑟ノ上ニ出ツ、然ルニ其説又天神ニ假托シ、自ラ神子ト称シ、密法秘幻術ヲ行ヒ、未來ノ賞罰ヲ轉シテ、更ニ現世ノ神通ヲ示ス、一生ノ現行、一ノ神怪ナラサルハナシ、亦孟ノ余燼ヲ拾フニ過キサルノミ、假令果シテ勸懲ノ意ニ出ルモ、全ク詐ヲ設ケテ、人ヲ迷ハスニ外ナラス、凡造化ノ事ハ明メ難フシテ、幽冥ノ界ハ疑ヒ易シ、鬼神ニ謂ツテ冥福ヲ祈ルハ、人情ノ常ナリ、姦雄其機ニ投シテ、迷ヲ誘ク、洪荒ノ時、艸怪木妖皆能人心ヲ惑セリ、古史所載万国皆然リ、独一真神ノ説ハ、人ノ意表ニ出テ、最モ人心ヲ歸一セシムルニ足ル、然ルニ君長ヲ假尊トシテ、天神ヲ真父トシ、現世ノ政令ヲ外視シテ、冥府ノ賞罰ヲ仰ク、勸化ヲ忠トナシ、教ニ死

スルヲ榮トス、灌油自ラ盟ヒ、動モスレバ政府ニ抵抗ス、洋史載スル所十字軍百年ノ戰、新旧三十年ノ争、皆人ヲ殺ス幾千万、其他羅馬法王ノ專裁、僧門ノ横暴、各國中世ノ大乱、大抵皆教法ノ禍、其慘酷実ニ洪水猛獸ノ比スヘキニ非ス、洋史回護シテ明ニ乱原ヲ推本ケズ、讀ム者亦識眼ナク、却テ其説ノ猛ナルニ酔テ、其流傳ノ廣キヲ羨ムニ至ル、其後嗎哈默アラビーヤニ起リ、又孟瑟耶蘇ノ説ヲ祖トシ、教旨ヲ以テ兵ヲ用ルノ機械トシ、東西二万余里ヲ侵奪セリ、蓋シ神教ノ通患獨リ耶蘇ノミニ非ズ、凡ソ神明ヲ假リ、人民ヲ誘フモノ流傳スルコト必ス易クシテ、而其害ハ血ヲ流スト知ルベシ、支那ノ古モ、鬼神ノ説盛ニ行ハレ、唐虞三代モ占トヲ以テ、政事ニ用ヒタリ、孔氏ニ至テ始テ鬼神ヲ遠サケ、民義ヲ務メ、生ヲ知テ死ヲ知ラス、其言布帛菽粟一毫ノ神怪ナク、一点ノ禍胎ナシ、真二千古ノ卓見ト云ヘシ、且阨日多以來印度歐洲皆所謂僧族ナル者有テ、出家離俗天人ノ間ニ居、専ラ教柄ヲ握ル、是神姦ノ測數ナリ、儒教ニテハ、政教一致官府ノ外ニ僧府ナシ、余宇内ノ書ヲ讀テ、断然儒教ヲ以テ正大第一トス、大凡宇内ノ教派ニアリ、一ハ神明ヲ假ルモノ、一ハ神明ヲ假ラサルモノナリ、夫天下ノ道理ハ、窮リナキモノナレハ、儒教モ亦必ス盡サ、ル所アリ、但シ從今幾千年後聖人ナルモノ世ニ出ルアツテ、漢ニ非ス、洋ニ非ス、自然ニ原キテ教ヲ立テテハ、必ス其神明ヲ假ラサル者ニ因ルヘシ、是固リ一時ノ盛衰ヲ以テ論シ難シ、天地ノ大數ヲ云ヘハ、千年ハ一瞬間ナリ、耶蘇教ノ盛ナル未タ止ム期アラス、我レ思フ今數百年間儒教ハ、必ス破滅シテ絶ヘサル綫ノ如キニ至ラン、是亦怪ムニ足ラス、抑モ西洋ニ「ヒロン

「ト称スル一種ノ理學者アリ、本希臘ニ出テ中比教門ト合シ、千七百年代ノ始ヨリ、其流稍々盛ニ、間々豪傑アリテ、異常ノ説ヲ唱へ、教門ノ非ヲ打チ、人ノ心思教旨ノ為ニ束縛セラレ、天然ノ自由ヲ失ヘルヲ慨キ、終ニ無神ノ説ヲ立ル者アルニ至ル、我又思フ從今幾千年後一ノ大豪傑アリテ、彼此長短盛衰ノ外ニ高歩シ、千古ノ迷雲ヲ破テ、天下ノ人心ヲ快活ナラシムルアラシカ、今或ハ儒教平常ナルヲ厭ヒ、一種世ニ適フノ神教ヲ造作シ、以テ民信ヲ歸一セシメントスルガ如キハ、其意善シト雖トモ、千載ノ後「ヒロソープ」家ノ為メニ笑ハレンコト、最モ口惜シ、恭惟ニ我カ 前王人ニ取テ善ヲ為シ、公道ニ本キ物我ヲ忘レ、詢治于有識、求道于六經<sup>二句字多矣</sup>、真ニ万世ノ準的ナリ、仰願クハ、今日ニ在テ廣ク万國ノ長短ヲ鑑ミ、治具民法農工百般ハ、之ヲ西洋ニ取り、支那ノ衰風ヲ刪リ、又倫理名教ノ事ニ至テハ、断然天下ニ布示シ、古典國藉ヲ以テ父トシ、儒教ヲ以テ師トシ、二典禹貢無逸幽風大雅諸篇學庸論孟ノ書ヲ以テ、令典ニ著シ、學校普通ノ教トシ、以テ百世ノ後論定マルヲ待ち給ハンコトヲ

世ニ孟軻ヲ打ツ者アリ、然ルニ孟軻ノ性情ヲ論スルハ、孔氏ニマサリ（後欠）